英米文学史講座

KENKYUSHA

英米文学史講座 第五巻
十 八 世 紀 I

昭和 36 年 6 月 25 日 印 刷　昭和 36 年 7 月 1 日 初版発行
昭和 43 年 4 月 10 日 6 版発行

監修者　福 原 麟 太 郎
　　西 川 正 身
発行者　小 酒 井 益 蔵　東京都新宿区神楽坂 1 の 2
印刷所　研究社印刷株式会社　東京都新宿区神楽坂 1 の 2

発行所　研究社出版株式会社　東京都新宿区神楽坂 1 の 2
振替口座 東京 83761 番

定価 560 円

目　次

イギリス文学概観 . . . . . 朱牟田夏雄　1
イギリスの詩歌 . . . . . 村上不二雄　32
イギリスの小説 . . . . . 内多　毅　51
イギリスの演劇 . . . . . 中川龍一　72
イギリスの批評 . . . . . 加藤龍太郎　92
散文・随筆・ジャーナリズム . . . . . 福原麟太郎　110
デフォー . . . . . 宮崎芳三　130
スウィフト . . . . . 米田一彦　146
ポープ . . . . . 村上至孝　163
フィールディングとスターン . . . . . 松村達雄　182
ドクター・ジョンソン . . . . . 柴崎武夫　203
アメリカ文学概観 . . . . . 斎藤　光　219

索　引 241

イギリス文学概観

朱牟田夏雄

十八世紀はイギリス文学史の上で、従来しばしば擬古典主義 (pseudo-classicism) の時代とよばれた。あるいは、大体においてその前半をポープ (Alexander Pope) の時代、後半をジョンソン (Samuel Johnson) の時代、とする呼称もある。擬古典主義の時代とするのは、イギリス文学の本流を詩にあると見て、この時代の詩風の大きな特色を時代そのものの呼び名に使ったわけであるし、また、後半がジョンソンの時代とよばれるのは比較的無難だとしても、前半をポープで代表させるのはやはり詩を偏重した考え方であると言わざるを得ない。今日の目から見るとき、十八世紀イギリス文学の最も大きな特色は、小説、あるいは散文の文学がその地位を確立したという一点にこそ求められるべきであり、その事実を度外視したような時代呼称は、当を得たものとは絶対に言い得ない。名の問題はともかくとしても、この世紀の文学を語るばあい、実質的に小説の勃興と発達とに相当な重点がおかれるべきは当然であろう。本稿もその見地から筆をすすめたいと思うが、その前にすこしく時代の背景にふれておこう。

i. 時代の背景

1688 年のいわゆる名誉革命で、迎えられてイギリスの王位についたウィリアム三世 (William III, William of Orange) は 1702 年に死し、王妃メアリーの妹にあたるアン (Anne) が、同年即位してあとをついだが、この女王が後つぎなしに 1714 年になくなったので、十七世紀のはじめからのスチュアート王家 (the House of Stuart) がここに絶えて、ジョージ一世 (George I) がドイツから迎えられて位についた。ハノーヴァー王家 (the

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

House of Hanover) のはじまりで、以後この世紀のあいだの王位は、ジョージ一世 (在位 1714-27)、その子同二世 (1727-60)、二世の孫同三世 (1760-1820) とつたえられることになる。名誉革命で王位を追われたジェイムズ二世 (在位 1685-88) は、いわば古の王権神授説的な思想を多少とも持ちつたえた最後のイギリス国王であり、クロムウェルの革命、名誉革命と、イギリスの王権は次第に制限を受け、それに代って、それだけ民権が伸びてゆくことになるわけだが、ハノーヴァー王朝になってその傾向はいよいよ顕著になったといってよい。もちろん 1714 年以後も、ひそかにスチュアート王家に心をよせるものは一部にあり、それが 1715 年と 1745 年と、二回比較的大きな復辟運動となって多少ともイギリスの朝野に動揺を与えたことは、たとえばフィールディングの *Tom Jones* (『トム・ジョウンズ』) などにも取り入れられている事実であるけれども、所詮それらも大勢に影響を与えるには至らなかった。ジョージ一世が英語を解せず、そのためにそれまでの歴代のようにみずから閣議を主宰することができなかったという事情も、イギリスの責任内閣制の確立、つまりは王権の抑制と民権の伸長という方向に力を貸したわけであるが、しかしそのような傾向はすでに動かしがたい大きな趨勢であって、一個の偶然の事情によって突如もたらされたものと考えてはなるまい。

スチュアート王朝までの専制君主的王権にとって代った民権を代表するものは、いうまでもなく政党であるが、イギリスの政党としては、1680 年ころにすでにトーリー党 (Tories) とホイッグ党 (Whigs) の対立が見られる。[1] 前者はのちの保守党 (the Conservatives)、後者はのちの自由党 (the Liberals) の前身であることはいうまでもないが、前者には大貴族・大商人が多くてより多く王党的であり、後者は地方の地主・紳士階級や聖職者

1. Tory, Whig の二語は、ともにもとは反対党への綽名のようなものであった。1679 年ころ、王弟 James (のちの James II) を、彼がローマ・カトリック教徒なるのゆえに王位にはつけまいとした一派が Whigs, それに反対した James 擁護派が Tories とよばれた。これを正式に政党の名と認め得るのは 1689 年からであると、*N.E.D.* はしている。

などが中核となって、民党的色彩が強かった。この世紀に入ってアン女王はなおトーリー党を重用したが、ジョージ一世が迎えられてからは急速にホイッグ党の世となった。1714 年から 1760 年まではいわゆるホイッグ全盛期で (14 巻から成る *The Oxford History of England*——『オックスフォード版イギリス史』——の、この時代を扱った巻の題も、'*The Whig Supremacy, 1714–1760*'——『ホイッグ全盛時代』——となっている)、この間にイギリスの議会民主主義の基礎はしっかりと据えられたといってよい。ジョージ一世以後、両院を通過した法案を拒否した国王は一人もなく、また、「るいれき」(scrofula) という病気は、いつの頃からか国王にさわってもらうとなおると信じられて、そのために 'king's evil' という別名を生じ、現にこの世紀後半の文豪といわれる前記サミュエル・ジョンソン (1709 年の生まれである) も、幼時この病気があったので、その母はわざわざロンドンにつれて行ってアン女王の手でさわってもらったと伝えられるが、こういう病気を持った国民にさわってやろうとする国王も、このアン女王が最後であったという事実[1]なども、科学的知識の普及ということもさることながら、一面王権の消長と関連しても一つの象徴的意義を持つと考えることもできよう。

Anne 女王

政治上のこのような民権の伸長は、また、一般市民の経済力の向上や社会生活の充実と切り離しては考えられない。スチュアート王朝末期のイギリスは、まだ全体として貧しい、経済的にも文化的にもフランスあたりの後塵を拝している国であり、人口も 1689 年にはイングランドとウェイルズでまだ 600 万以下 (1750 年にやっと 650 万、それが 1831 年になると、

1. *N.E.D.* の 'king's evil' の項を引くと、この事実もまた幼いジョンソンがアン女王に手をふれてもらった件も、説明または引用の中に見えている。

1,400万にふえている)、[1] しかもその約半数は、かつがつ食ってゆくだけのかせぎもどうかという有様であった。それには農業の方法などもまだごく幼稚な状態にあったことが考えられ、ある学者が、スウィフトの *Gulliver's Travels* (『ガリヴァー旅行記』) の中で大人国の国王が述べる意見 (同書第二巻第七章)、「これまで一穂の麦、一葉の草しか生えなかった土地に、二穂の麦、二葉の草ができるようにする人、そういう人間こそ、結局政治家などという存在を全部束にしたよりも、はるかに人間として価値があり、また国家にとって真の貢献をなすものだ」というのを、その時代の相当多くのイギリス人の意見だったろうと見ているのも、見当ちがいではないように思える。しかしこのような貧しさ、とぼしさの一方で、すくなくとも首都ロンドンでは、前世紀の末からこの世紀にかけて、次第に都会生活、市民生活が充実して行ったことは事実である。

十八世紀のコーヒー店内部

この時代のロンドンに、コーヒー店 (coffee house) というものが非常にはやって、そこにひまな市民たちが多数集まって種々雑談をしたり、あるいはニュースの交換とか政治論をたたかわすとかいう類が盛んにおこなわれたということは、多くの書物に見える事実であるが、ある書物によると このようなコーヒー店の はじまりとしては、1652

1. 前出 *The Whig Supremacy, 1714-1760* が推定している数字は、十八世紀初頭のイングランドとウェイルズを合わせた人口が約 550 万、1760 年ころで約 700 万、1801 年は最初の国勢調査があった年で、この時の人口が 917 万余、となっている。

年[1]—ギリシア人が、自分の顔を看板として City の中心部コーンヒル (Cornhill) というところに開店したのがそもそもの最初であり、それが後 100 年を経ないうちに、同業の店の数が市内を通算して約八千にふえていたという。これなども、ロンドンの市民にそれだけの経済的・時間的・また精神的な余裕が生じて来たことを、消費生活の面から証明している事実と見てさしつかえない。

十八世紀はイギリスが、フランス及びスペインを相手とする植民地獲得合戦、海外市場の開拓競争に、着々と勝利を占めて行った時代であり、首相ウォルポールの堅実な平和政策とも相まって、海外貿易額も着実に伸びて行った。[2] 工業の進歩は、何しろまだ産業革命以前のことであるから、今日の目から見れば言うに足りないものではあったが、科学への関心が高まったこととも関連して、鉄の製錬法、石炭の採掘法その他に、少しずつ改良が加えられて行ったことは事実であり、これらが上記海外貿易の順調な伸びに寄与していることは疑いをいれないところである。ロンドンをはじめ、ブリストル、新興都市リヴァプール等々の都会の商工業者たちは、こうして次第に地位を築いて行ったわけである。

このような市民生活の向上は、いろいろな面に有形無形な変化を招来したが、たとえば社交生活のようなものもだんだんにはじめられた。現在もつづいているロンドンの社交季節 (social season) という習慣がはじまったのも、この十八世紀前半のこととされている。そういえば beau, dandy, buck, fop というような、「伊達者、にやけ男」を意味するいくつかの類義語が、時期の多少のズレはあるが、多くこの時代からしきりに用いられはじめたことも注意してよいであろう。ことに傑作なのは macaroni とい

1. ジョン・イヴリン (John Evelyn) は 1637 年の日記に、オックスフォードに来た一ギリシア人がコーヒーというものをのむのを自分ははじめて見た、この習慣は 30 年後までイギリス人のものとならなかった、と書いているそうである。

2. 1714 年の輸入総額 579 万余ポンド、輸出総額 769 万余ポンドに対し、1760 年には前者が 894 万余ポンド、後者は 1469 万余ポンドとあるから、輸出の方は二倍に近い伸び方である。

う一語で、これは 1760 年ころから使われ出したらしいが、イタリアあたりの社交界に出入りしたことを鼻にかけて、「オペラは何といってもイタリアでなくちゃ」というようなことを口ばしる鼻持ちのならぬ「あちら族」を嘲弄的に言いあらわす称号であった（はじめはそういうイタリアがえりの本人たちがロンドンに Macaroni Club というのを設立したところからこの普通名詞が発生したらしい)。このことからもう一つわかることは、当時はまだ文化的にはイタリアが先進国であり、イギリスは完全にその後塵を拝していたということである。事実イタリアの二三流のオペラ一座がイギリスに巡業に来ても、大いにチヤホヤされて大あたりをとったことは、1730 年代のイギリス劇壇のことを書いたものの中にも見えているところである。

この時代の娯楽は、十七世紀にひきつづいて、熊いじめ (bear-baiting) とか闘鶏 (cock-fighting) とかいう野蛮低級なものがまだはばをきかしていた。劇場は賑わってはいたが、概してあまり高級な出し物ではなく[1]、政治諷刺のきわもの的なものが観客の熱狂を生んで、時に王党派と民党派とが観客席を二分して、あてこみのせりふごとに喝采したり弥次ったり、あげくのはては見物同士のつかみあいになるというようなことも、そう珍しくはなかったらしい。*Tom Jones* の 13 巻 11 章に、女主人公ソファイアがはじめてロンドンに出て、何げなく芝居見物に出かけたところ、まさにこのような場景にぶつかっておびえあがり、第一幕も終らないうちにとび出して帰ってしまうところが描かれているのも、それを物語っているわけである。

娯楽のすくなかった当時の市民たちは、犯罪人の処刑などを面白がって

1. 1698 年に国教会の牧師ジェレミー・コリア (Jeremy Collier) というものが、*A Short View of the Immorality and Profaneness of the English Stage* という文章を書いて演劇の頽廃を攻撃して以来、イギリスの劇はすっかり沈滞した。この世紀を通じて、目ぼしい劇作家といったら、前半でのジョン・ゲイ、後半のシェリダンとゴールドスミス、他二、三をかぞえ得るに過ぎない。

見に行ったりもした。タイバーン (Tyburn) というロンドンの郊外の地に処刑場があって、ここで名のある盗賊の死刑が執行されたりするときは、貴顕淑女から庶民に至るまで、無数の見物人が押しかける、棧敷も設けられる、もの売りが出る、市内では大概の店が業を休む、という有様で、さながら何かの祭りのようであった。十八世紀イギリスの代表的な画家にホガース (William Hogarth, 1697–1764) という名手がおり、好んで世相を諷刺する画をものしたことは後にもふれる機会があると思うが、この人が残した、そういう刑場に群集した見物人の図は、すこぶる有名である。

トム・アイドルの Tyburn 行き
(Hogarth 筆 *Industry and Idleness* より)

処刑のことが先になったが、当時は盗賊その他の犯罪人が非常に多かった時代である。ことに十八世紀前半には、日本ならさしずめ石川五右衛門とか鼠小僧次郎吉とかにあたるような、高名であるのみならず一面では庶民の人気の的であるような盗賊が輩出した。ジャック・シェパード (Jack Sheppard, 1702–24) とかジョナサン・ワイルド (Jonathan Wild, 1682?–1725) とかリチャード・ターピン (Richard Turpin, 1706–39) とかは、特に有名である。ワイルドはデフォー (1725) とフィールディング (1742) の両巨匠によって作品化されているし、シェパードに関しては処刑の年 1724 年に同じくデフォーが書いたほか、いくつかのバラッドがとりあげて題材としており、さらに十九世紀の多作な作家エインズワス (W. H. Ainsworth, 1805–82) の小説 (1839) になったり、つい最近もあるジャー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ナリストが *The Road to Tyburn* (『タイバーンへの道』1957) と題して彼の生涯をつづったり、という工合で、今日に至るまで非常な人気者である。この男は若年の美青年だが、数々の強盗行為をはたらいた上に、何度入牢しても、どんなに堅固に警備されても、神わざ的に必ず脱獄してしまうという点に、人気を集める大きな原因があったと考えられる。ワイルドの方はもうすこし智能的で、大きな組織をもって盗品故買をやったり、時には警察にも食い入ったり、というようなことをしていたらしい。ターピンも文学作品と無縁ではないが、これは単純な兇悪犯だったようだ。

このような知名の犯罪者たちに対して、無名の小ものたちも相当派手な活躍をしていた。当時とすれば遠距離陸上用の唯一の交通機関であった駅馬車 (stage-coach) をおそって、乗客の持ちもの一切をはぎとる 'high-waymen' もおり、市中といわず街道すじといわず、日が暮れてから戸外に出ていることは、良民にとっては危険・被害を覚悟してかかる必要があった。フィールディングの最後の小説 *Amelia* (『アミーリア』1752) は、作者がウェストミンスターの治安判事に就任した後の作品であるから、特に市中の暗黒面の実情に世人の注意を喚起しようという意図もあってかと思われるが、追いはぎが出たり、ひる日中公園で弱そうな女づれの一団に因縁をつける地まわりあるいは愚連隊ふうの若者が出たり、物騒なロンドンの場景を随所に描いている。また、それをとりしまる夜警 (night-watch) というのが、ヨボヨボに近い老人たちで、いざという時の用に立たないとか、あるいは刑務所の内部でも、金さえ係員につかませれば勝手なまねがしていられるとかいうことも、やはりこの *Amelia* に描かれた当時の世相の一面であった。フィールディングにはこの作と前後して、別に、*An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, etc. with some Proposals for Remedying this Growing Evil* (『最近漂盗の激増せる原因の調査、ならびにその対策についての建言若干』1751) という文章がある。これはむろん文学作品ではなく、治安判事としての職責から彼がものした

論文であり、それをよむと、上流階級の奢侈からの感化で下層階級の間にも次第に身分不相応の贅沢、遊興の風がはびこり、淫売窟、賭博場、その他いかがわしい娯楽場などがむやみにふえ、ジンなどやすくて強い酒の消費量もとみに増したこと、また貧民の管理が教区役人の責任であるのに、それらの役人が私腹を肥やすことにのみ熱心で、適切な管理がおこなわれていないこと、などが、犯罪増加の大きな原因として指摘されている。ジン (gin) という単語も、英語としては十八世紀にできた言葉で、この酒がはじめて輸入されたのは 1710 年代らしいが、非常に時好に投じてまたたく間にロンドン中を風靡し、1733 年ころには市内に 6,000—7,000 ののみ屋ができ、ジンの年間販売量は、1734 年に 4,947,000 ギャロンだったものが、1742 年には 7,160,000 ギャロンにふえた。ジンに酔いしれる庶民の姿は、これもホガースの名筆にとらえられている通りで、この酒が市民の健康にも良俗にも大いに害をなしたことは明白である。これに対して政府は 1729 年以来何度か「ジン取締り法」(Gin Act) を公布して、その販売を何とか制限しようと苦慮したが、最後の 1751 年の、上記フィールディングの建言などにうながされての抜本的措置までは、ほとんど実効をあげることができなかったのである。

当時、貧富の差がいちじるしかったことは上にもちょっとふれたが、平和の持続と貿易の伸長とが一方で新しい富裕な階級を生み出した半面、貧民階級はむしろ前代以上のみじめな立場にうごめく有様であった。1730 年にイギリスを訪れたポルトガル人ゴンザレス (Gonzales) なるものは、その旅行記に、「立法府は貧民救済のための立派な法律を数多く用意し、また事業の数も彼らの全部を雇用するに十分なのであるが、にも拘らず管理の怠慢さのために、この国ほど貧民の重荷にあえぐ国はなく、また貧がこの国以上にひどい状況にある国もたくさんはあるまい」と書いている。[1]

1. *The Whig Supremacy, 1717–1760*, p. 125.

極貧者の子供は、生まれると同時に教区の施設に収容されるさだめだったが、1715 年、ある教区でそのような施設に収容された 1,200 人の嬰児のうち、四分の三はその年のうちに死んだとか、1750-5 年の調査では、2,239 人の収容児が 5 年後に生きていたのは 168 人とかいう、惨澹たる統計が残っている。しかも、世の中全体の気風が堅実であれば、貧しい者は貧しいなりに分に応じた生活をいとなんでゆくこともまだしも可能であろうが、この時代のように全体の空気にうわっ調子なところが濃いと、貧しい者が鼻のさきに見せつけられるものと自分らにゆるされたものとの大きなギャップに非常に絶望的になり、ひいては前述のように小犯罪者たちが横行することにもなるのは、むしろ理の当然であろう。さらに十八世紀も終り近くなると、一方では次第に進行しはじめた産業革命の傾向、他方では 1790 年ころからの戦時下のインフレイションが、ともに、農民を貧民化し従来の貧民をさらに極貧化する大きな要素となって作用した。イギリスはこのようにしていよいよ深刻となった貧民問題の解決に、ほとんど十九世紀一ぱいを必要としたといわれるが、このことは、次の世紀のディケンズの小説などを読んでも十分にうなずき得ることである。

John Wesley

以上の数節は、事によると十八世紀の頽廃面あるいは暗黒面をすこし強調しすぎたきらいがあるかも知れない。もちろん一方にはそれを嘆き、それを是正しようとする精神あるいは機運も動いていた。ウェズリー (John Wesley, 1703-91) やウィットフィールド (George Whitefield, 1714-70) などを中心とする、いわゆる「メソジストの運動」('Methodism') もそうであるし、オウグルソープ (James Edward Oglethorpe, 1696-1785) の社会事業なども特筆に値する。この人は本来軍人であるが、借財刑務所 (debtors' prison) に拘置される人たちの更生に非常に尽力し、1732 年には北米にジョージア (Georgia) 植民地を開いて、貧しい人々の

安んじて働らける理想郷を建設しようとした。詩人ポープにも作中で大いに賞讃されている人物である。'Noblesse oblige'（身分高きものには義務あり）というイギリス伝統の精神は、この時代にも決して行方不明ではなかったのである。

煎じつめれば十八世紀は、数多くの欠陥は持ちながらも、いわばまだ野育ちのままの、無邪気さを失わない時代だった。市民階級ははじめておのれの生活を持ったし、一方に貧民をかかえながらも、商工業や海外貿易の順調な伸びは、投資するだけの余裕のある中産階級にとってこの世紀を天国の感あらしめた。市民同士の連帯意識もこの頃から芽ばえ出したと言ってよく、一方に特権階級の腐敗や偽善もなくはなかったが、国全体としては大らかで天真爛漫な、そしてその意味で健康な、生活を営んでいたといってよかろう。十九世紀以後、今日になってもよく用いられる'snob'というイギリス特有の言葉は、所詮ヴィクトリアニズムの産んだ児といってよく、十八世紀にはまだ存在しない単語だったといえば、あるいは奇異の感を抱かれる読者もあるかも知れないが、これはまさしく *N.E.D.* が証明してくれる事実なのである。

ii. 哲学・科学・宗教

このような社会情勢を背景にして十八世紀のイギリス文学が展開してゆくわけであるが、この時代は一言でいうならば、前代を継承してマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) のいわゆる「散文と理性の時代」('age of prose and reason') である。それは単にせまい意味の文学についていえるだけでなく、広くこの時代の精神生活のいろいろな面にもあてはまることであり、それらと切り離して狭義の文学史上の諸現象のみを考えようとすることはむしろ滑稽であろう。そういう意味で、当時の思想界の主立った動きにも若干目をむけておこうと思う。

哲学者としては前の世紀に有名なジョン・ロック (John Locke, 1632–

1704) が出ている。彼の代表的著作 *An Essay Concerning Human Understanding* (『人間悟性論』) は 1690 年に世に問われたが、これは認識論における経験主義の立場を確立させた名著として、いかにもイギリスらしい思想であり、同時に十八世紀的思考の哲学的基盤をおいた功を見のがしてはならない。彼はまた同じ 1690 年に、二篇の政治論 *Two Treatises on Government* (『政治論考』) を著しているが、これは彼の政治的思想を明らかにしたものであり、ここでは人間の基本的自由、社会契約説の立場から専制君主制が強く否定されている。名誉革命に理論的根拠を与えて、以後の議会民主主義の発達に力強い支柱の役目を果した点に、この著述の劃期的意義があるといってよい。わずか 40 年ほど前、トマス・ホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) が *Leviathan* (『レヴァイアサン』 1651) を書いて君主ないし国家の絶対権を擁護したのと比べるならば、目を見張るに足る進歩的な著作であり、この思想はジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacque Rousseau, 1712-78) やトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) に受けつがれて、それぞれフランス革命やアメリカ独立運動の原動力・推進力となった。イギリスのみならず十八世紀の世界全体を大きく動かした思想家といっても過言ではない。

ロックのあとを受けた当代の哲学者としては、バークリー (George Berkeley, 1685-1753) とヒューム (David Hume, 1711-76) に指を屈すべきであるが、唯心論の立場をとった前者はともかく、後者は *A Treatise of Human Nature* (『人性論』 1739-40)、*Philosophical Essays concerning Human Understanding* (『人間悟性論考』 1748) 等を出して、徹底的な経験主義の立場から、経験に基づかないすべての知識を排斥した。神もまた彼によって排撃されたことは当然であり、無神論者という非難が彼に集中することになった。代表的十八世紀人というべきであろう。なお彼については、「哲学的名著でもヒュームのように明快にも書けるのだ」と、作家モームを嘆じさせた名文家でもあったことを言い添えておいてもよかろう。

彼の影響を受けた古典経済学者アダム・スミス (Adam Smith, 1723–90) も、すこしおくれるがやはりこの世紀の人で、その有名な *Wealth of Nations* (『諸国民の富』) が出たのは 1776 年であった。

Adam Smith

宗教の方に目を転ずると、前の世紀の終りごろからこの世紀のはじめにかけては、理神論 (deism) とよばれる思想が大いに勢力をふるった。これはこの一派の代弁者とも見られるトーランド (John Toland, 1670–1722) の著書が *Christianity Not Mysterious* (『キリスト教は神秘ならず』1696) と題されていることからも察し得るように、要するに神を合理的に解釈しようとする説であり、いかにも「理性の時代」にふさわしいと言えよう。一方では前の時代の時代精神であったピューリタニズムや、それにつづいた宗教教義に関する煩鎖な論争・対立——それはたとえばスウィフトの *A Tale of a Tub* (『桶物語』1696) や *Gulliver's Travels* などで揶揄嘲笑の対象となっているが——などへの反動という面も見のがすことはできない。ウィリアム三世即位後の信仰上の寛容主義 (Latitudinarianism) の傾向はこの理神論を確立させる大きな力になった。この派には一流の思想家というほどの人物を見いだすことはできないが、時代精神の生んだ一つの産物であることは決定的な事実である。のちのヒュームが、この理神論的立場をさえ否定したことは、さらに合理的思考を前進させたわけである。[1]

このようにして神も君主も、言いかえれば教会も国家も、次第にかつての絶対権を奪われ、人権、民権の思想が次第につちかわれて行ったことは、この時代の大きな特色である。そして、このことと表裏をなす今一つのいちじるしい進展は、科学の進歩であるといわねばならない。近代自然科学

1. この世紀の中葉に起った前記 Methodism の運動は、要するにこの理神論的風潮、熱誠ある信仰を軽んずる傾向への反動として起った信仰復活運動であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com